



桜町防空壕落盤事故慰霊碑に平和を誓う児童

語り継ぐ 平和の誓い

12月8日は太平洋戦争の開戦・真珠湾攻撃の日です。20世紀は「戦争の世紀」と呼ばれるほど、世界中に大きな傷跡を残しました。ふるさと能登が経験した戦争の記憶を風化させないように、活動が続ける人たちがいます。



日本に関係する主なできごと

- 1894年・明治27年 8月1日 日清戦争勃発
- 1904年・明治37年 2月10日 日露戦争勃発
- 1905年・明治38年 5月27日 日本海海戦でロシアのバルチック艦隊壊滅
- 9月5日 日露講和成立
- 1931年・昭和6年 9月18日 満州事変勃発
- 1937年・昭和12年 7月7日 盧溝橋事件・中国に全面侵攻
- 1939年・昭和14年 5月12日 ノモンハン事件。日ソ両軍が戦闘
- 1941年・昭和16年 12月8日 真珠湾攻撃。太平洋戦争が勃発
- 1945年・昭和20年 8月6日 広島に原爆投下
- 8月9日 長崎に原爆投下
- 8月15日 日本降伏、太平洋戦争集結

高齢化が進み困難になる

平和を伝える活動

能登町の日清戦争以後の戦没者は1,455人です。各地に忠魂碑や慰霊碑が建立されていて、毎年追悼の行事が開催されています。

町には能都・柳田・内浦の各地区に遺族会があり、これらから組織される能登町遺族連合会が、町慰霊祭の実施や、県の行事への参加などの事業を行っています。現在の会員数は401人いますが、高齢化が進んでいます。

高齢化により、平成25年には県の傷痍軍人会が組織を解散、翌年には旧日本海軍の戦友会である「県海交会」もその活動を終えました。戦争の体験を訴え、平和を伝える活動が困難になってきました。

	能都地区	柳田地区	内浦地区	合計
戦没者数	709	279	467	1,455
遺族会の会員数	125	85	183	401
今年の追悼式の参加者数				115



今も癒えぬ 遺族の悲しみ

父亡き後、迷い苦しんだ
戦後の生活

能登町遺族連合会長の益田英治さん
「鶴川」は、太平洋戦争で父の盛夫さん
を亡くしました。大阪・吹田の駅近くで
表具店を営んでいた益田さん一家。英治
さんの一番古い記憶はこの吹田周辺の風景
です。父と母、弟の4人家族でした。

「空襲の際には駅の裏の防空壕に、防
空ずきんをかぶって逃げ込みました。幼
くて戦争ということがわからず、B29の
ライトが見たくて何度も外に出たことや、
敵機が去ったあと、避難した人たちがたき
火にあたっていたことを覚えています」。英
治さんの手のひ

らには、その時のたき火によるやけどの跡
が残っていて、幼い頃の記憶と重なります。

父・盛夫さんは岡山県津山市出身です。
太平洋戦争直前の昭和15年、旧陸軍の歩兵
として、戦地に赴きました。昭和20年、
ビルマ（現・ミャンマー）のトングー近郊
で帰らぬ人となりました。

残された母と子は、貨物列車に乗って父の
郷里・岡山を目指しました。母



親が胃がいれんを起こし、医者を探めて知らない町を巡るなど、旅路には不安が
つきまといました。幼い英治さんの記憶はそ
こで途切れます。「父を亡くしてから、どう
すればよいかわからず、迷っていたら」と当
時の母の気持ちを察します。両親が健在だっ
たこともあり、母のふるさとである鶴川に
戻りました。母・つぎさんは保育所の給食
員や農作業の手伝いなどに励み、英治さん
ら2人の子を育てました。

身内にも明かさなかった
悲しみの記憶

英治さんが父について詳しく知ったのは、
ごく最近のことです。つぎさんは夫がどの
ような人であったか、英治さんをはじめ、
周囲に話せませんでした。

た。英治さんが幼少の頃の記憶を元に、
当時のことを母に話しても「よく覚えていた
ね」と応じるだけで、自分からは語りませ
んでした。自身が遺族会の活動を進めるに
あたり「父のことを知っておかねば」と思
う時期もありましたが、「昔のことを思い出
し、母がつらくなるだろうから、聞かなか
った」と振り返ります。父親の性格や遺言
なども全くわかりません。

つぎさんが平成16年に亡くなり、遺品を
整理していたところ、盛夫さんの本籍地・
岡山県が発行した「死亡告知書」や勲記、
写真類が出てきました。英治さんはその存
在すら知らなかったため、驚きました。告
知書は下敷きが透けて見えるほど薄い紙で、
傷んで読めなくなっているよう、書類のコ
ピーも大切に収められていました。

追悼の辞を述べ、御霊に平和を誓う益田さん
(10月1日・町戦没者追悼式)



唯一の遺品である写真。
後列右から2人目が父・盛夫さん



写真は戦友らとの集合写真で、唯一の形見です。軍服で佇む父親の姿を見て、自分の顔と似ていると感じました。「いつかミャンマーに遺骨収集に行きたい」と願うようになりました。

母親の苦勞がどのようなものだったのか、益田さんは折に触れて思います。2人の子を連れて焼け野原に立つ母親の写真をみると、「私の母もこうだったのかな」と、かつての自分たちの姿と重ねます。

遺族会が直面する

会員の高齢化問題

能登町遺族会連合会の会員数は10月現在で401人。戦後すぐに誕生した

子どもらも、まもなく70代を迎えます。戦時中のことを覚えていた世代は80、90代とさらに高齢です。

遺族の高齢化は全国の遺族会の共通の悩みです。毎年10月に行われている町の戦没者追悼式では800人以上に案内をしています。実際に参列する遺族は100人程度にとどまります。益田さんは、遺族会の活動が途切れな

いかと不安を感じています。「戦争というものは二度とあってはならないもの。伝え続けるため、本人が参加できない場合は配偶者でもいいから参加してほしい」と切実に願っています。

有志によって行われる 各地の慰霊行事

町 主催の戦没者追悼式の他にも、各地で有志による追悼行事が続けられています。瑞穂にある「山田郷戦没者慰霊碑」では山田郷慰霊碑保存会主催の慰霊式が行われていて、今年の8月で37回を数えます。保存会の石井良明会長は「戦争を知らない人の方が多い中、風化させてはならない感謝の心を忘れがちなっています」と、慰霊を続けることの大切さを強調しました。



8月1日、酷暑の中に行われた柳田地区慰霊式

柳 田保育所の園庭に隣接する柳田地区の忠魂碑は大正時代に建立されました。遺族会の柳田支部が追悼式を行っています。

碑文は日本海海戦の連合艦隊司令長官であった東郷平八郎の揮毫です。柳田保育所のある場所は、柳田小学校の敷地でした。昭和52年発行の「柳田村集落誌」には、軍国主義による教育を恐れ、太平洋戦争後に倒されたことが記されています。

現在は元の通りに建てられています。現在、碑の上部に折れたような跡がくつきりと残っています。



109柱の戦没者が眠る
山田郷戦没者慰霊碑



昭和18年に旅順で撮影した写真。
後列左端が中瀬さん。

異国でつる 望郷の思い

捕虜として過ごした

青春の日々

中瀬精一さんⅡ上町Ⅱは戦後、シベリアで捕虜生活を送りました。

教員として能登部町立青年学校(現・中能登町立鹿西小学校)勤務の昭和16年の1月に旧陸軍に入隊。七尾から満

州・牡丹江省に渡りました。歩兵としてすごしたのち、下士官になり新京の関東軍司令部作戦班に転属しました。

昭和20年8月に敗戦が決まってからまもなく、関東軍司令部の涉外係としてソ連軍司令部の命を受け、物資をシベリアに送る業務に従事させられました。10月いっぱいその作業にあたり、

11月中旬に自らもイルクーツクに向けて出発しました。

シベリアに送られる捕虜たちは、「日本海に面するウラジオストクに向かう」「帰還される」と伝えられ、希望をもたせられて連れられました。しかし中瀬さんは司令部にいたため、自らが捕虜としてシベリアに行くことを知っていました。

最初の地はイルクーツクから約30キロ離れた場所での鉄道工事現場でした。捕虜たちの多くは、最初の冬で命を落としましたが、中瀬さんはなんとか乗り越えました。「満州で過ごしていて体が肥えていたことと、郷里で農業に従事していたため、体が丈夫で粗食に慣れ、労働にも抵抗がないことが良

かった。体の大きな者ほど早くに死にました」と話します。

食事は1日2食。重さ3キロの黒パンを10人で分け、そのほかは塩や砂糖、肉などが一緒に煮込まれたものが出されました。満腹になる量ではありません。翌朝、昼のために支給されたパンに手をつけました。パンを食べずにとっておくと盗まれてしまうという「何とも情けない」状況だったそうです。粗食のため「便をしてもエン麦の殻ばかりで、ころころと兎のフンのようだった」と振り返ります。

ひもじさ、極寒の気候に加え、捕虜を悩ませたのは虫です。夏の山はアブやナンキンムシが容赦なく襲ってきます。シラミも大敵でした。かゆさがす

中瀬精一さん。短歌や俳句は現在も楽しんでいて、活発に創作活動を行っている



京都府舞鶴市「舞鶴引揚記念館」近くに復元されている栈橋。

この場所にたどり着けなかった兵士も多くいた。

さまじいだけではなく、伝染病を媒介するため「シラミがなかったらあんなに人が死ななかった」と振り返ります。ソ連も戦争の影響を受けました。戦死者が多く出たことから男性が少なく、人口の比率が大きく狂われました。貴重な労働力である捕虜には重いノルマが課せられました。

厳しい捕虜生活を力づけたのは、万葉集や佐藤春夫詩集など、戦地に持ち込んだ歌集・詩集です。歌集の余白に和歌を書き込むなど、創作が生きがいでした。残念ながら帰国の直前、ナホトカでソ連の手により、全て燃やされてしまいました。

昭和23年7月に舞鶴に帰還。ようやく祖国の土を踏むことができました。「海外では耳にできなかった、下駄の音が忘れられない」「金髪ではなく、黒髪の女性がエキゾチックに見えた」



戦後の中瀬さん一家

など、さまざまなことが記憶に残っています。

なにより感激したのは畳と柿の青い実。夏の風景でした。「在所の子どもの祭り笛を聞いたときには体が震えた。ああいう感激は普通の人生では味わえないものです」。

舞鶴上陸後に800円を渡されました。教員としての初任給が18円だったため、一時は大金をもらったと思ったのですが「店先に並んでいたビワが一皿50円以上していて驚きました」。シベリア抑留の間にさまざまなことが変化していました。

帰国の翌月に結婚、3人の子に恵まれました。能登に帰ってきてからは農業に従事し、現在も家業として能登牛の生産、肥育を行っています。話を伺った日は牛の市があり、「7頭の牛を出荷した」と話しました。農業について話す顔は喜び、明るい表情でした。

捕虜時代の体験を次代につなぐため、復員してすぐ、記憶していた短歌や詩をノートに記しました。これを元に作った歌集「シベリアの歌」には過酷な生活の記録、青春時代の心情が綴られています。

「シベリアで命を拾ってきた」と話す中瀬さん。その言葉からは、平和のありがたみがにじみ出ています。

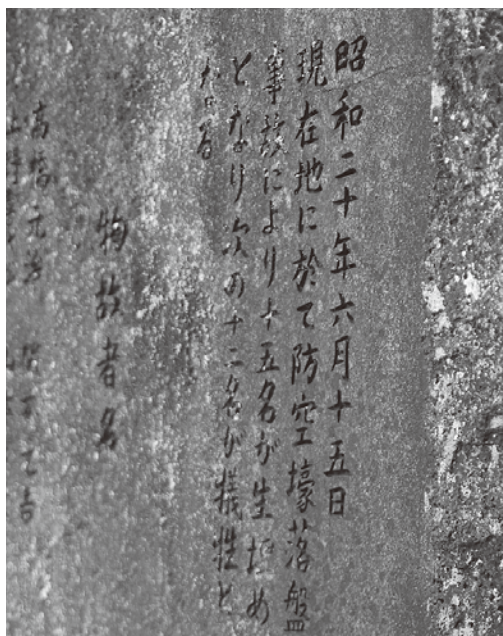
終戦直前に訪れた悲劇

防空壕落盤事故

この事故で父親を亡くした関本満喜子さんⅡ宇出津Ⅱは、「当時のことは絶対に忘れられない」と話します。

父親の乙吉さんは満州などで軍隊生活を送りました。終戦前年の昭和19年12月に一時帰国し、能登にいました。防空壕を作る場所について「土が軟らかい場所だから危ない」と言っていたそうです。

脳裏に焼き付いている
変わり果てた父の姿
戦争による悲劇は、戦場にとどまらず、街中でも起きました。昭和20年6月15日、宇出津の桜町で進められていた、防空壕の造営作業中に落盤事故が発生。15人が生き埋めとなり、うち12人が亡くなる大惨事が発生しました。



戦時中、大人たちは常に働いていたため、幼い関本さんは父親の顔を覚えていません。ただ、その仕草は目に焼き付いています。事故の日の朝、酒を一杯あおってから出かけた姿、そして土から堀り出され、戸板にのせられた泥だらけの姿は今でもはっきりと思い出されます。

事故は正午ごろに発生したとみられます。父親は一番奥で作業していて、助け出されたのは、すっかり暗くなつてからでした。12人が死亡した大事故ですが、戦時中ということもあり報道はされませんでした。

70年経った今も続く

戦争の悲しみ

戦後の暮らしは苦労の連続でした。戦没者遺族ではないため、補償から漏れています。子守りをしてその駄賃でノートや鉛筆を買ったり、親と一緒に出かけて色んな仕事を覚えたりして過ごしました。関本さんは「勉強をしろと言われたことはありませんでした」と振り返ります。

同級生の中には、戦地で親を亡くした人もいました。その同級生たちは6年生の時に靖国神社に行く機会があり



慰霊碑は常椿寺に隣接する高台に建てられていて、宇出津の町を見守っている。



関本満喜子さん

多くの子どもと関わった
関本さん。「子どもはす
ばらしい宝物。何よりも
勇気を与えてくれます」
と話します。

関本さんは小学生の
頃、学校をほとんど休
みませんでした。皆勤賞
が誇りだっただけではな
く、「仲間と一緒に遊ぶ
のが最高だった」から
です。だから、いじめに

子どもたちに託す

平和への願い

長い時間を経た今も、慰霊碑の前に
立つと事故のことを思い出します。「父
がこの下に埋まったのかと、胸がいっ
ぱいになります」。慰霊碑建立から
毎年、宇出津小学校児童が千羽鶴を折
り、命日に合わせて慰霊行事を行って
います。ことしで20回を数えました。

「私たち遺族がやらなければならない
折り鶴づくりを、子どもたちが真心込
めてしてくれます。胸がいっぱいにな
ります」。慰霊祭の当日も感激のあま
り、感謝の言葉を出そうにも、声につ
まり上手く伝えられないそうです。
保育士として35年にわたり従事し、

心を痛めています。「いじめは小さな
戦争で、とんでもない結果を生むこと
もあります。親に心配をかけないよう
に、いじめに遭っていることを話さな
いでいる様子は本当に痛ましいです。
先生や親など上から言われるのではな
く、子どもたち同士が手をさしのべ
あつて、いじめのない学校にしてほし
い」と訴えます。「大人になってから
の人生はすばらしいものです。いじめ
による自殺などは絶対にあつてはいけ
ません」。

「戦争という文字からは喜びは生ま
れません。『ありがとう』『おかげさま』
という言葉で広がる、横のつながりが
大切です。常に覚えておいてほしいで
す」と児童たちの成長に期待を寄せま
した。

自分が住む町の 戦争体験を伝える

宇出津小学校児童会は10
月、北國新聞社の「北國あす
なる賞」を受賞しました。こ
の賞は、善行や奉仕活動を続
け、長い間地域に貢献した児
童・生徒に贈られるものです。
桜町防空壕の慰霊行事を20年
間続けていることが評価され
ました。



慰霊行事に加えて、児童は

ことし、防空壕落盤事故の犠牲者遺族
である関本さんにインタビューを実
施。戦争によって、身近な宇出津の町
にどのような影響があつたのかを探り
ました。

インタビューや調査でわかったこと
は、夏休み中の8月6日、登校日に行
われた全校参加の平和集会で発表され
ました。

児童会の委員会ごとに、当時の衣服
や食べ物など、日常生活について調査
しました。配給制度のことや食べるも
のが少なかったことなど、戦時中の暮

平和集会で発表を聞く児童たち



らしを学びました。

児童らの祖父母の多くは、戦争を体
験していない世代です。家族同士で体
験を語り継ぐことが難しくなりまし
た。関本さんの平和への思いを聞き、
いろいろなことを感じて成長した児童
たちに、大きな期待が寄せられます。

行事に参加した児童は、活動を通じ
て学んだことについて、感想を話して
くれました。関本さんの証言をはじめ、
戦争の悲惨さを心に刻んだようです。

◇

防空壕を作る作業をしていた人に、
女の人や妊婦さんが含まれていたとい
う話が意外でした。

—岩本麻里さん（6年生）

いろいろ大変なことがあつたことを
聞いたから、もう戦争はしてほしくな
い。

—新谷彩音さん（6年生）

いまは戦争がなく、心配なく生きる
ことができ、本当にありがたいと思
います。

—松村尚くん（5年生）

宇出津小学校の人には、これからも
千羽鶴の活動を続けてほしいです。

—寺下愛美さん（6年生）

今こそ求められる

「平和を語り継ぐこと」

バブル経済崩壊後の日本は「失われ
た20年」と言われ、景気の低迷に見舞
われました。就職難や地方経済の疲弊
など、若い世代にとって非常につらい
時代が続いています。そんな中「戦争
をすれば景気が回復するのではない
か」という意見が書籍やネット上でみ
られました。このことを関本満喜子さ
んに伝えたところ「とんでもない話で
す。言葉の重みというものが全くわ
かっていません」と答えました。

関本さんの「満喜子」の字は、誕生
した時に満州に出征していた父に、喜
びを伝える、という意味をもって名づ
けられたそうです。戦争は親がいて、
子がいる、そんな人間同士が殺し合う
悲しいものです。

太平洋戦争は8月15日に終わったわ
けではなく、遺族にとっては現在も続
いている、消えることのない悲しみで
す。戦後という言葉は遺族にはありま
せん。

70年という歳月を経ても消えない悲
しみがある一方、記憶は急速に風化し
つつあります。平和への誓いを次代に
伝えていくよう、努力を続けていかな
ければなりません。



「北國あすなる賞」の賞状を手に笑顔を見せる児童会運営委員